

東京2020大会を見据えて

第3回 日本における女子スポーツの萌芽 — 人見絹枝ひとみきぬえの登場

田中 ひかる



岡山県総合グラウンドにある人見絹枝像



1922年設立当時の二階堂体操塾（現日本女子体育大学）

画像提供：日本女子体育大学

アリス・ミリアが中心となつて開催した「世界（万国）女性競技大会」の第二回イエテポリ大会（一九二六年）には、日本からただ一人、人見絹枝が参加した。これは日本にも女子スポーツ連盟ができたことによるが、実はこの連盟は、人見絹枝という逸材を国際大会へ送るため、急ぎ創設されたのだった。

日本でもまだ女子スポーツが一般的ではなかった一九二〇年代、絹枝が進学した岡山高等学校は他に類をみないほどテニスに力を入れていた。絹枝もテニスに興味をもったが、家計が苦しく、「ラケットが欲しい」というひと言が言えなかった。それでもテニスをやりたいという気持ちを押しさえきれず、思い切って母に相談し、父に内緒でラケットを買ってもらった。ここから絹枝のアスリートとしての人生が始まった。

スポーツウェアが無かった当時、女性は袴を穿いてその裾をひもでしばり、足袋を履いて運動した。しかし絹枝の大きな足に合う十一文半（約二七・五センチ）の足袋は、岡山市内の呉服店では扱っておらず、手に入れるのに苦労した。ちなみに、身長は当時の成人女性の平均より二〇センチ程高かったため、近所の少年たちからかわれたり、外出先で無遠慮な視線で眺められたりすることもしばしばあった。

初めテニスで頭角を現した絹枝は、陸上競技にも目覚め、女学校校長の強い勧めで東京の二階堂体操塾（現日本女子体育大学）へ進学した。その後、第二回明治神宮競技大会（一九二五年）へ出場し、五十メートル走と三段跳びで優勝を果たした。三段跳びは十一メートル三五センチという世界新記録であった。この活躍は全国紙で報じられ、絹枝は一躍有名人となった。

第二回世界（万国）女性競技大会へ招聘された絹枝は、「私は競技を始めて満一カ年にならないのだから、世界の名選手の間に伍して競技することはできない」と参加を固辞したが、日本中の期待に背中を押され、悲壮な決意でイエテポリへと旅立った。

たなかひかる：コラムニスト。歴史社会学者。生理用品連絡協議会共同代表。横浜国立大学大学院博士課程修了、博士号を取得。時代に翻弄される女性の研究を続ける。現在は1928年アムステルダムオリンピックに唯一の日本人女性として出場した人見絹枝について執筆中。著書に『月経をアンネと呼んだ頃』、『「オバサン」はなぜ嫌われるか』、『生理用品の社会史 タブーから一大ビジネスへ』ほか。